

第2回初級養成講座 講座概要

「富士山はご神体！それって何？」「須走」の富士講と御師を探求しよう」

第2部「御師とは？」

■日時：平成29年11月12日（日）13時～16時

■場所：富士浅間神社 社務所

■講師：布施 光敏 ふじさんミュージアム 学芸員



■講義概要

1. 御師とは何か

- 「ふじさんミュージアム」は富士山の信仰を中心に展示している博物館である。
- 寺社や寺院を核として発達してきた都市が全国各地にある。吉田、須走、大宮もその代表的な都市の1つ。信仰の対象となる寺院や寺社、霊山、聖地を訪れるために旅をして、巡礼・巡拝という形で旅立っていく。中世以降、富士山は修験者が山内に分け入って修行するような山になっていく。修行する人だけではなく、一般に参詣するために登山をする人達が増えてきた。有名なところでは、伊勢神宮、伊勢参りをはじめとして多くの人々が各地の信仰対象に参り詣でるようになる。遠くから来る人達も増えていった。
- そういった人達を組織し、地元の霊山、聖地に招き入れ、誘いながら宿泊させ、信仰の対象となる所には案内や取次ぎ等神仏と参詣者を結びつける職業的な宗教者が登場してくる。「御師」という言葉を国史大辞典で見ると、「特定の社寺に属して、参詣者をその社寺に誘導し、祈祷や宿泊などの便宜を図る宗教者」を言う。「御師は元来御祈祷の略で平安時代中期まず寺院で用いられたが、神社で祈祷を行う比較的下級の祠官も御師と呼ばれるようになった」と説明されている。祈祷師が略されていると説明されているが、「お祈り師」とか「おんのとりにし」が縮まって「御師」と呼ばれるようになったというのが名前の由来ではないかと言われている。
- 富士山信仰における御師の役割は同じで、人々を富士山に招き入れ、信仰を広め、参詣登山者と富士山の神仏との仲立ちをする重要な役割があった。御師という名前がどういう風に使われていったかと言うと、吉田の場合だが、近世の初めは多くは「上吉田村御師」という言い方である。御師が神道化してくる。それまで修験的な要素（真言を読んだり、お経を読んだり）だったが、江戸時代以降、神

道化し神職として免許を取得していくようになる。吉田家、白川家など有名な大きな神社があるが「浅間御師」、江戸時代後半になると「富士浅間御師」という言い方が定着してくる。江戸時代、御師は神道化していくが、多くの参詣者が山元にやってくる。そういった人々を受け入れる受け皿になっていく必要があった。神道という形に傾くだけでなく、富士講に代表されるような参詣の登山の人たちをうまく取り込んでいく形で色んなバリエーションを持ちながら御師が活動していく事になる。

—資料の写真は、明治後半の金鳥居からみた富士山の写真。多くの富士参詣者の道者が上吉田にどのくらいやってきたのか?いつくらいからやってきたのか?というお話をしていく。

2. 富士吉田の御師の成り立ち

—大月方面から富士吉田を見た航空写真。扇状地に町が広がっている。上吉田の町は、元々は古吉田と書かれていたところから、1572年に町を丸ごと移転して作られている。なぜ町を移転したのかは、はっきりしたことは解っていないが、富士山の春先に起こる融雪洪水＝雪代を避けるためだったのではないかと考えられている。間堀川は本来、空堀だが雪解け水や大雨が降った時にはどっと水が流れる。ちょうどカーブしているところが氾濫し、ここにあった集落を襲ったのではないかと考えられている。実際に穴を掘ってみると土砂が堆積した跡が確認されているので、おそらく雪代を避けるためだったと考えられている。

—神社に対してまっすぐ町が形成されなかったのかは、雪代に直接襲われてしまうこともあり、地形的な要因から川と川に挟まれた間に街を形成したという風に考えられている。

—古吉田の時点で御師が活動していた。「勝山記」という資料に多くの登山者が来ているという記録が残されており、御師が存在し、その登山者を受け入れる体制が整っていたということが分かる。

—登山をする人々がいつ頃から来ているのかは、山頂の初穂打場左近小屋でお祀りされていた銅造の地藏菩薩立像「富士禅定」と書かれていて、背面に乾元2年(1303年)と記名が残されている。治めた人が「益頭庄沙弥光実、同比丘尼(ましずのしょうさやこうじつ、どうびくに)」と名前が書かれている。現在の藤枝市の光実が登山を記念して奉納したものであると考えられている。こういったことから一般の人たちが登るようになった14世紀ごろから参詣登山があったと考えられる。勝山地区の勝山記に記録があるが、「明応九季 庚申 此年六月富士へ道者参る事限無 関東乱ニヨリ、須走へ皆道者付也」。道者という言葉が出て来るが、この道者は富士山に参詣する人のことであり、中世のころには大衆的な富士山の登山が行われていたことが分かる。

—吉田口で確認されている一番古い登山奉納札「参詣者奉納札」。江戸時代以前から一般の方々の登山が分かる資料となっている。天正19年、水戸茨城の人から18度登山をした記念に収められた奉納札。このことから、広く一般の庶民に富士参詣の登山が広まっていたことが分かる。このころ吉田は、御師が多数存在していたと考えられている。

—江戸時代後半の絵図では、登山案内図として、このような絵図が各登山口でたくさん刷られるようになる。彩色がきれいで、富士山を描き、富士山の形だけでなく、登山道を歩けるように詳細に描かれている。どこにどういう施設があるのか、実際に登山の内容が分かり、信仰の中心として、浅間神社社叢が細かく描かれている。金鳥居から浅間神社の方向に向かって約1.1kmの長いスロープ状の傾斜地が続いてこの街並みが続く。須走と似ている。江戸時代は傾斜地があるので、屋敷地はひな壇状に形成されている。富士山を神の山を仰ぐように荘厳な雰囲気があったのではないかと想像される。

—金鳥居から見た上吉田のイメージ図では、明治の初め位までは、水路が中央に残されている。上吉田の町の特徴的なことは、板葺きの屋根。幕末に英国公使のアーネストサトウの日本旅行日記の中に「通りは階段状になり、その段ごとに両側に家が1軒ずつある。山に50、30度と登ったことのある熱心な

- 信者が建てた石灯ろうと標柱が見られる。道の真ん中には小川が流れている」と記録されている。明治8年頃、中央にあった感じの良い水路が道の両側に振り分けられ、現在は歩道になっている。
- 一上吉田の地割は計画的に整然となされている。特徴的なのは、両側を川で挟んで、外から守っている。外敵の侵入を防ぐために周りを堀で囲み、地形的にも優れている。また、周りを寺社で囲むことにより、地形的だけではなく、霊的な守りも付加すると考えられている。色々なものから守りを固めた都市として設計されていた。古吉田の方が地形的に低く、上吉田の方が高くなっているというのが色々な意味で都合がよかった。浅間神社からまっすぐ降りてくる道ではなく、L字型になる道で町が計画的に作られたとみられる。上宿、中宿、下宿となるが、1572年の段階で区画されたのが中宿までで、そこから下は1606年に新しく町を付け足した。1572年から35年後に町を増設しなければならなかった理由は町を大きくして人をどんどん受け入れようとしたと考えられている。
 - 一明治25年に発行された「富士嶽神社境内全図」という絵図では、富士山を描き、浅間神社を詳しく書かれている。これの優れている点は、それぞれの家の形を忠実に書き上げ、どんな御師がいたかが分かる。上吉田の御師はどこまでさかのぼれるかは詳しく分かっていない。当初36坊だと言われている。元亀3年の段階の「吉田口に行く」という記録を見ると、50件くらい御師があったと読み取ることができる。文禄4年の段階では御師数63件、坊数36件とある。1572年の段階で古吉田から移ってきた御師たちのことを本御師と呼んでいた。たつみちを上って奥に屋敷を構えた。新しい御師は町御師と呼ばれた。御師株を取得して御師になっていったと言われる。江戸時代後半には86件の御師。近代になって、74件という数字が見られる。昭和初期戦前までは46件。時代とともに数が減ったり増えたりしている。明治に入ると半分くらいに減少している。
 - 一御師の家は、タツミチという引き込み路を設けて奥に屋敷を構える。細長い住居が特徴の一つ。自分たちが通常住む空間と信仰的な空間を分けて生活していた。実際に、神殿がある間は当主以外、普段は全く入れなかった。格式をもって対応していたようだ。玄関が一つあり、中の口と呼ばれる玄関がもう一つ、勝手口と呼ばれる出入り口がもう一つ。御師の家は、出入り口が3つある。先達など偉い方が正式な玄関から入り、一般のお客様は中の口、使用人や家の人は勝手口から入る。住居の使い分けがなされていたようだ。富士講をはじめとした富士講の講社さんは、タツミチを通して、用水の水路（ヤーナ川）から水を引き込み滝を設けてある。ここで襦、祓いをして旅の汚れを取って玄関に入ったと言われている。
 - 一1930年頃には水垢離（みずごり）を取らなくなったという聞き取りもされている。昭和50年代に用水の整備をして、滝を取り払った。このようなことが、上吉田の御師の屋敷の特徴である。

3. 御師の役割と機能

- 一御師の職分①登山参詣人に対する宗教的儀礼の執行②宿坊の提供、登山の世話③檀家廻り④富士山信仰の普及⑤富士山北口の維持管理である。
- 一①は、登山にやってきた人たちの安全祈願の祈禱をし、檀家の人の神楽の奉納、白装束に印鑑を押す、お札を刷って配る。畳を裏返して弓を打つ写真もあり、宗教的な儀礼行為を行っていた。②では、宿坊の提供が夏場のメインの仕事だったと思う。登山者を受け入れて、接待応接をして宿泊所として登山を支援することが重要な仕事の一つ。御師は多い所で、一度に100人受け入れたと言われている。泊まりきれない時には知り合いの家をお願いして行者さんを泊めたと言われているほど、登山客には人気だったようだ。毎年定まった日に行っていたようなので、準備も怠らなかったようだ。夏場は住み込みで料理人、女中さん、お勝手を取り仕切るおばちゃんたちが対応していたようだ。登山案内の手配、剛力の手配、お弁当を作り、持たせたり、受け入れに対しては気を遣っていたようだ。

- 御師もいろんな講社さんがおり、裕福な講社だとたくさんお金を落としてくれるので、講社の力関係によってある程度接待の中身も変わっていたようだ。送り迎えにも表れていて、江戸時代には到着した講社を金鳥居の下に改め役所があったがそこまで出迎えに行った。もっと気を遣う講社だと下吉田まで迎えに出たと言われている。御師当主が見送りや出迎えに出ることもあるが、若い小旦那さんが神社まで見送りに出たりしていたようだ。
- 資料「富士講の坊入りと登山」は、順を追ってどんなお世話をしていたのかを書いてある。到着して、休憩し、拝みをあげた後、夕食までに時間があれば案内を伴って胎内の方にお参りに行った。夕食は気を遣って出していたしていたようだ。講社によって厳しい戒律があり、四足のものを出さないとかあり、料理の中身も変えていたようだ。戦後しばらくは食糧事情も悪く、しばらくの間は米2合持参してもらったという記録もあった。蛤や海苔を持ってきてもらったり、中でもあさりの佃煮はとてもおいしかったという記録も残っている。
- 御師の暮らしを支える主な財源は、山役銭、宿賃。檀家廻りでお札を配布した初穂料、講社から特産物、講印が入ったものが奉納された。ドテラの貸付料などもあり、御師と富士講のつながりが密接だったことが分かる。講社が来た時には、寄進奉納された講社さんのマークが入ったものを用意して気持ちよくお泊まりいただいた。行衣の判料、金剛杖、草鞋、菅笠、脚絆なども販売していた。半紙も扱っていた。胎内を回られる方に、腹帯も売っていた。
- 登山期以外は、檀家廻り、祈祷など宗教的な儀礼も行っていたようだ。檀家廻りは、今で言う営業活動。信仰者を広めて拡大していく一方で、積極的に営業活動を行っていた。大きな講社や広い範囲の檀家さんを抱えている御師の中には他に請け負わせて檀家廻りをしたようだ。檀家廻りの時は、富士講の先達や講元のお宅に宿泊し、お札の配布などを泊りがけで一つの村で行っていたようだ。そのようなところがない講社は、講員持ち回りでそれぞれお宅に泊まった、と記録に残っている。
- 吉田の御師がどこに檀家があったのかという資料である。武蔵国が一番多く、千葉方面上総、下総も数が多い。東京、千葉という範囲に多くあった。関東一円に広がるような形に檀家が来て受け入れるようになっている。須走も武蔵、千葉が多かったというところで似ている。関東一円はじめ広くから甲州道中を経て、大月から富士見町を通して吉田に関東一円の行者が集まってきていたということが分かる。江戸時代には村数でいうと9,000の村々から来ていた、と言われる。関東一円、福島、宮城、岩手、青森、秋田の一部、ほぼ東日本全域から富士山に向かって集まってきた。
- 資料「御師と富士講の一年」。夏場の登山期以外、冬季に檀家廻りを行い、講社との関係を維持していた。富士講の最大の行事夏の登山、富士講にしてみれば、地元でいろいろな行事などがある。
- 「御縁年令式」と言って万延元年1860年に板橋宿に掲げられ、現在残っている唯一の御縁年の立て札。吉田の御師は各宿場の要所に立て札を立てて、「富士登山にぜひ来てください」という誘致宣伝を行っていたなか、御縁年には、登山者を多く富士山のふもとに引き寄せるために、江戸の出入り口に立て札を立てる権利をもらっていたと言われている。現在の掲示板やポスターでの誘客で、富士山の信者を多く引っ張ってくる活動だ。
- 御師は富士山の信仰を広げる現代という旅行代理店や宿泊施設であったのではないかと考えられる。富士登山に対して受け皿になってきた御師たちは、今でも活動を続けているが、数は少なくなっている。御師そのものの活動をしているというよりも旅館・民宿的な経営をされている。「御師」という職業に関して今でもプライドを持って臨まれている。
- 吉田口には御師団として組織され、38軒位が残り、機能している。